

町田市立鶴川第三小学校

校長 剣持 明正  
(公印省略)

## 2020年度 学校評価報告書

### 1 今年度の学校経営計画の重点

(※) (感染予防による) 臨時休業に対応する様々な教育活動において、「児童の教育への計画的な実施  
および保護者・地域の不安の解消を目指す学校」

①昨年度3月からの臨時休業が長引く中、休業で影響を受けた児童の学習を補償する学校経営

(1) 学習指導「学ぶ意欲を育て『生きる力』を伸ばせる学校」

- ①新しい教育における授業力の向上・・・「アクティブラーニング」「カリキュラム・マネジメント」
- ②プログラミング教育・・・プラグドおよびアンプラグドの実践 事例研修の機会活用
- ③「えいごのまちだ」・・・外国語授業の指導力向上 (MEPSやALTの有効な活用)
- ④地域の自然環境や人的環境を生かした体験活動・・・「ボランティアコーディネーターの活用」

(2) 生活指導・進路指導「笑顔のあいさつとやさしさの溢れる学校」

- ①学年に応じた「鶴三小スタンダード」を基本とした、一枚岩の指導体制
- ②生活場面で活用できる、児童の「思考力」「判断力」「表現力」の育成
- ③「心のアンケート」の活用から児童理解へ (人権を尊重、いじめ対策、自己肯定感、家庭環境)
- ④保護者の理解が得られる指導 (情報共有の努力 傾聴の姿勢 立場の理解)

(3) 学校運営「社会に開かれた教育課程の実現を目指す学校」

- ①保護者、地域からの信頼に応える学年学級経営
- ②「PDCAサイクル」による改善 (評価を踏まえた積極的な経営参画)
- ③「OODAループ」により、状況の変化に応じて臨機応変に判断し即座に行動する力の育成  
(指示待ちの行動から脱却することで、目的を重視し、本質を捉えて行動する力を付ける)
- ④公務員としての自覚をもち責任を果たす (サービスの厳正、個人情報保護、人権尊重)
- ⑤「報・連・相」の徹底と迅速な対応

(4) 特別活動・その他「様々な人との関わりを深める学校」

- ①児童が集団の中で、自己の役割意識と活躍の場をもつ (自分の居場所、自尊感情、達成感)
- ②異年齢集団での活動や人とかかわる活動の充実 (協力や信頼の気持ち、社会性育成)
- ③奉仕、ボランティア活動の充実 ○親身の相談 (いつでも職員室、校長室にどうぞ!)
- ④学校公開と情報発信「見える学校」

(5) 研究・研修「教師自らが学び続け、互いに高め合う学校」

- ①研究推進への積極的な参画 (国語教育、オリ・パラ教育推進等)
- ②自分のためが子供のためになる研修意欲 (校内研究、小教研、都研等での積極的な研修)
- ③若手の研修意欲を支える主任教諭がもつ育成意識への期待
- ④向上心をもち、振り返りから、自己の授業力・教育力の向上へ (子供のために)

## 2 自己評価の総括

(※) (感染予防による) 臨時休業に対応する様々な教育活動において、「児童の教育への計画的な実施および保護者・地域の不安の解消を目指す学校」

- ①・臨時休業・分散登校で、大きな課題であった「授業時数」の確保は、長期休業日の短縮・毎月の土曜授業日設定・行事の精選および縮小等により、学習指導要領の定める標準授業時数は、全ての学年で確保することができました。元々、年間計画における余剰時数(標準授業時数を超える授業時数)を多めに取っていたことも幸いしました。ただし、決して余裕があった訳ではなく、教員たちの教材研究・教材準備は、例年よりも厳しい進行管理が必要でした。
  - ・児童の学習における理解・定着には、保護者の協力も大きく影響しています。家庭学習の期間で、多大なるご理解とご協力が得られたことは、感謝の言葉しかありません。今年度の授業がスムーズに進められたことも、保護者の家庭学習でのご協力があったからと、教員も自覚しています。
  - ・児童の学力が確かなものになっているかの検証は、引き続き行いながら、次年度は特に注意が必要であると自覚しています。積み上げが基本の学習であることから、既習事項の確認を常に行いながら次年度に臨む必要があり、一つの重点項目に位置付けたいと思います。

(1) 学習指導「学ぶ意欲を育て『生きる力』を伸ばせる学校」

- ①・授業の初めには、「本時のねらい」を明確にし、終わりには「ねらいの振り返り」の時間を設け、1時間1時間を丁寧に組み立てる授業を実践してきました。その展開場面では、「主体的・対話的」な学びができるように工夫をこらしています。ただ、コロナ感染防止のため、話し合いの時間は極力控え、前を向いての発言や、挙手による把握等に注意しました。また、既習事項の確認を踏まえた進行も定着してきました。
- ②・アンプラグドにおけるプログラミング教育は、教科指導における様々な場面で、論理的なものの考え方や、人に伝わりやすい発言の仕方、学習における手順など、プログラミング的な思考を大切にとすることで高めています。ただし、クロームブックを活用するICT教育においては、その時間の捻出が厳しい今年度であったため、次年度への大きな課題となりました。
- ③・5・6年生の教科「外国語」は、専門の講師で授業を担当させたため、児童にとっては、楽しく学習に臨むことができたと思います。また、担任にとっても、1年間の外国語研修の機会となったことは、大きな成果でもありました。
  - ・3・4年生の外国語活動は、ALTやMEPSの活用で、成果がみられます。
  - ・町田市の施策「えいごのまちだ」事業では、MEPSやALTの配置が有効に活用でき、児童にとっては、ネイティブの英語に触れる機会や、担当者の指導力向上による分かりやすく楽しい授業が提供されるなど、本来の目的が実践という形で達成できました。
- ④・コロナ感染予防対策で大きな影響を受けてしまいました。地域の人材も極力縮小した形での協力は頂きましたが、交流を目的とする取組は、中止となってしまったものも多くなりました。その様な状況の中でも、ボランティアコーディネーターの尽力によって、福祉的な体験や、オリパラ教育出前授業など、児童にとっては年間計画に位置付けた体験授業が実施できたことは評価できました。

(2) 生活指導・進路指導「笑顔のあいさつとやさしさの溢れる学校」

- ①・コロナ感染予防対策に終始した1年間となりました。生活指導主任を対策委員長とし、養護教諭との2本柱で、感染防止に対応してきました。「できることをできるだけ」を合い言葉に、制約の多い児童の学校生活が楽しいものになるための工夫を行ってきました。基本とした感染対策は、「マスク」「手洗い」「3密の回避」「異学年交流の回避」「共用教室・共用場所の消毒」等です。他には、保護者の理解・協力による感染対策で、児童の健康観察の他、体調不良時等の登校自粛

にもご理解を頂きました。保護者アンケートでは、学校の対応に感謝している等の内容がほとんどであり、学校の対策に不満の声が一つも無かったことは、ありがたい限りでした。この一年間を乗り越えられた要因に、この保護者のご理解が大変力強いものでありました。

- ②・児童の「思考力」「判断力」「表現力」の育成を重点項目としてきましたが、児童の感染症対策への意識が、様々な効果をもたらし、本校の教育目標である「正しいことをやりぬく子」「友だちを大切にする子」「すすんで考える子」「からだをきたえる子」の達成に大きな成果を上げました。
  - ③・「心のアンケート」の活用は、担任がその実施目的を理解しているかによって活用意義が高くなるものであります。子供たちが安心して記入できる環境や、丁寧な聞き取りを実践していることから、児童の悩みの解決に大きく貢献している取組となっています。「児童には悩みがある」ことを前提に継続して、問題の早期発見・早期解決に役立てていきます。
  - ④・問題が発覚したときのみならず、日常的に学校の様子を伝える努力を続ける必要があると、私たち教員は自覚したいところです。今年度は、保護者への情報提供や保護者との情報共有を大切に考えられるように、教員にも保護者にもアピールをしてきました。その甲斐あり、問題が起きても、早期解決に至るケースがほとんどであり、解決による児童の安心感や、保護者との信頼関係が得られたことは、評価できるところかと思えます。
- (3) 学校運営「社会に開かれた教育課程の実現を目指す学校」
- ①・保護者との連携は、コロナ感染予防対策のこともあり、情報発信は例年になく多いものとなり、このことが結果として、信頼を築くことにつながったように感じています。逆に、地域との連携はほとんどできない状況で、青少年健全育成協議会での情報提供もまま成りませんでした。その様な状況の中でも、あいさつ運動や地域の見守りでご協力を頂きました。
  - ②・刻々と状況が変化するコロナ感染の状況において、短いスパンでの「P D C Aサイクル」による改善は不可欠なものでした。教職員が一体となって経営参画ができた1年でありました。
  - ③・②と同様に、「OODAループ」により、状況の変化に応じて臨機応変に判断し即座に行動する力の育成は、成果をもたらしたと感じています。状況を把握し、指示待ちの行動から脱却し、対応をすることで、目的を重視し、本質を捉えて行動する力を付けた教員集団となっています。
  - ④・継続して、「サービス事故0（ゼロ）」に臨んで参ります。
  - ⑤・各学年・各学級の様子は、ほとんど校長まで届いてきます。「報・連・相」の徹底により、よりよい対応や迅速な対応、学校経営はチームで臨む意識は定着しています。
- (4) 特別活動・その他「様々な人との関わりを深める学校」
- ・教科の授業以外でも、児童の活動場面はたくさんあります。身近な所での「学級会活動」、高学年の「委員会活動」、4年生以上の「クラブ活動」、また、本校では全校での異学年交流「わくわく遊び」もあります。児童が組織的に活動する時間です。教員は、児童の自治的な活動での個々の役割に応じた働きを応援し、児童の自主性や自分の居場所、自尊感情、達成感等を育てています。今年度はコロナ禍であり制限も多い中ではありましたが、児童はその制限を生かしながらの工夫を凝らし、「集団」を意識した自己の役割意識を高め、それぞれの場面で活躍しました。
- (5) 研究・研修「教師自らが学び続け、互いに高め合う学校」
- ・今年度の校内研究は、国語の研究「豊かに表現できる子～読む学習を通して～」を研究主題として、低・中・高学年の分科会形式で行いました。研究授業においては、コロナ禍での感染対策で、ICTを駆使して、協議会を運営してきました。テーマを絞り、全教員で研究に励む校内研究は、その対象者である児童の教育に大きな意味をもってきます。来年度も国語の研究（3年目）に臨むこととなります。
  - ・サポートルーム担当教員も校内研究に分科会として臨んでいます。今年度の研究主題は「自分の思いを伝えられる子～相手意識をもって～」とし、特別支援教育研修会に位置付け、全教員で

研鑽を深めました。

- 教師の使命として、指導力向上のための研修会に参加し研鑽を深めることがあげられます。町田市の小学校教育研究会は、コロナ禍ではありましたが、9月より研究会を開催し、各教科の分科会では、やはりICTの活用で開催方法を工夫しながら、研鑽を積んで参りました。

### 3 学校関係者評価の総括

今年度は5名のスクールボード理事で、協議会を運営しました。コロナ禍にて、学校公開が開催されなかったことで、理事の皆様への参観もほとんどできない状況となってしまいました。3回の学校支援地域理事協議会は開催し、学校評価に至っています。今年度の「児童アンケート」「保護者アンケート」の結果、「自由記述の集約と校長のコメント」や、アンケート結果の経年変化資料を基に、スクールボード理事それぞれに、学校関係者評価としてまとめていただきました。

各理事の評価は以下の通りで、5名分の資料となります。特にまとめた総括ではなく、各理事のコメントをもって学校関係者評価とさせていただきます。

#### ○ 竹村 礼子 様

今年度は新型コロナで学校行事への参加もほとんどなく、私たち町内会・自治会の行事もできないまま子ども達と触れ合う機会も少なく大変寂しい思いをしました。そんな中でも展示会は地域にも観覧させて頂き、子ども達の頑張っている姿を、作品を通して見せて頂く事ができました。また、地域の皆さんの作品も展示させて頂き、参加する事ができてとても嬉しく思いました。校長先生・副校長先生をはじめ、各先生方のご苦勞・ご努力に心より感謝致します。ありがとうございました。

#### ○ 大塚 勉 様

昨今の状況の中、アンケートの回答率にはいつも驚かされます。自由記述の内容も読ませていただきました。コロナ対応で、手探り状態で過ごした一年で、先生方、保護者の皆様も手探りで過ごしたことが読み取れます。スクールボード・地域協力者として、何か協力出来ないかと考えた一年でもありました。この経験を来期に生かすことが出来れば幸いです。今後も、情報交換を密に取りながら、可能性を探るのが大切と考えます。

#### ○ 佐藤 郁夫 様

高い回収率と、肯定的な意見が多い保護者アンケートの結果は、鶴三小がとても信頼されていることを示しています。この信頼をもとに、アンケートからこぼれた課題にも手を伸ばしていきたいものです。

#### ○ 功刀 みさほ 様

今年度はコロナという緊急事態により、鶴三小の教育方針の真価が問われた1年でした。学校教育において厳しい体制を強られる中、校長を筆頭に教職員が子どもたちに寄り添うべく賢明に取り組み、子どもたちも、不自由ながら登校できる楽しさにかえながら生活した様子がわかりました。鶴三小はこの環境の中、みんなで頑張りましたね。

#### ○ 森寄 愛里 様

アンケートは客観的に見るには良いと思います。ただのデータとしてみるだけでなく、地域との関わりが薄い時代に、学校・地域・保護者がそれぞれの立場で考えを述べやすい環境があることで、子供は大人たちが協力しあっている姿をみて多くを学ぶことができるのだと思います。

#### 4 学校評価を受けた改善策

##### (1) 既習事項の定着の丁寧な確認を忘れない授業実践

・教師が授業を行う上で心掛けることとして、今年度の授業において「つまずき」をもった児童はいるであろうことを前提とした授業の組み立てです。例年より授業の進み具合が早くなっているところで、浅い理解度の児童もいるはずですが、既習事項の定着の丁寧な確認を行うことが、児童が安心して授業に臨める環境になると思います。そのことを意識することが大切だと考えます。このことを、次年度の授業に臨む教師の基本姿勢に置きます。

##### (2) ICT教育環境を十分に活用する授業実践

・GIGAスクール構想によって、町田市のICT教育環境は大きく整備されました。クロームブックの児童一人1台、教室のWi-Fi環境の整備、プロジェクターによる大型提示装置等、教師が率先して利用・活用しなければならない現状です。さらに、次年度は、クラウドコンテンツによる教材も、クロームブックを活用して初めて利用できるものとなります。児童に活用させるためには教師がその使い方を学び、実践していくことが必修となります。ICT教育機器を有効に活用できる指導力の向上を目指します。

##### (3) 特別支援教育の研修

・人には人それぞれの個性があります。顕著なものは特性と呼ばれることもあります。さらに、その特性の一部は、発達障がいとして診断される場合もあります。集団の中ではなかなか確認できないような特性をもっている児童は少なくありません。その特性が、生活や学習をする上で、困難を招くこともあります。その困難で一番悩んでいる・困っているのは、「その本人である」ことを念頭に置き、私たち教員は、特別支援教育の理解が必要不可欠となります。毎年続けてきた特別支援教育研修会で学んだことを活かし、一人一人の児童を理解し、より適切な指導を行うことを目指します。

##### (4) 児童に関わる大人としての連携 「信頼」でつながる教職員と保護者

保護者との連携から信頼関係を築くための努力を行うことは、継続して行う必要があると感じています。具体的には、日常の情報提供のために、「学級・学年だより」またはICTを活用した「クラスルーム」や「学校ホームページ」の活用を行います。また、問題の生じたときには、迅速で丁寧な情報共有を第一と考え、解決のために歩調を揃えたり、協力を依頼したり、児童にとって我々大人が何をしたら良いかを相談し合える関係を築くことが基本となるような連携を進めていきます。